

奈良・平城宮・京跡

1 所在地 奈良市佐紀町・法華寺町・北新町

2 調査期間 推定第一次内裏地区 一九七九年十月～一九八〇年一月、東院地区 一九八〇年一月～五月、左京三条一坊十五坪 一九七九年七月、左京二条一坊八坪 一九七九年十二月、左京三条二坊七坪 一九七九年十二月、阿弥陀浄土院跡 一九八〇年二月

3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

4 調査担当者 狩野 久・岡田英男

5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡、都城跡、寺院跡

6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代初期

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

一九七九年度においては、宮内では二調査地区から、京内では五箇所から木簡が出土した。

一 推定第一次内裏地区(第二一七次)

平城宮の中央、朱雀門の北方は、推定第一次内裏・朝堂院地域と呼ばれている。本調査はその東北隅について実施した。第一次内裏地区は、一九六五年の第二七次調査以来七回の調査が行なわれており、今回の調査で東半部の調査は終了したことになる。

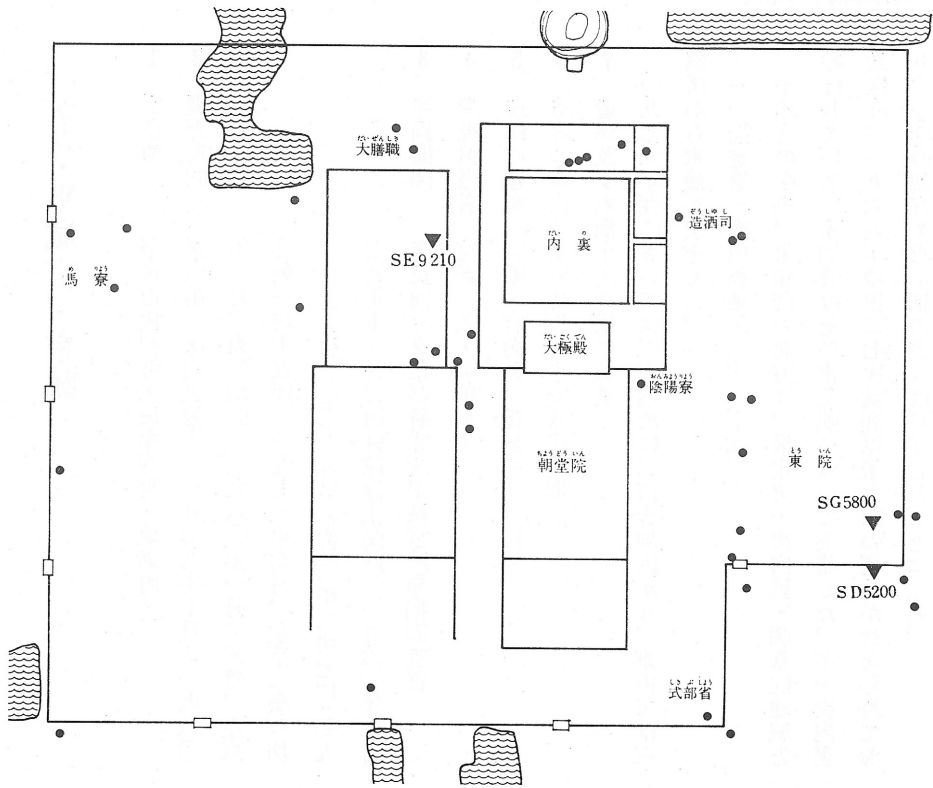
主な遺構は、埴積擁壁、石積擁壁、築地回廊、土塁、建物二棟、塀三条、井戸一基、溝、車道等で、また遺構は区画の変遷からA・B・Cの三時期に大別される。木簡はB期の東西八m、南北七mの大きな掘形をもつ井戸SE九二二〇から一点出土した。

二 東院園池西南地区(第二二〇次)

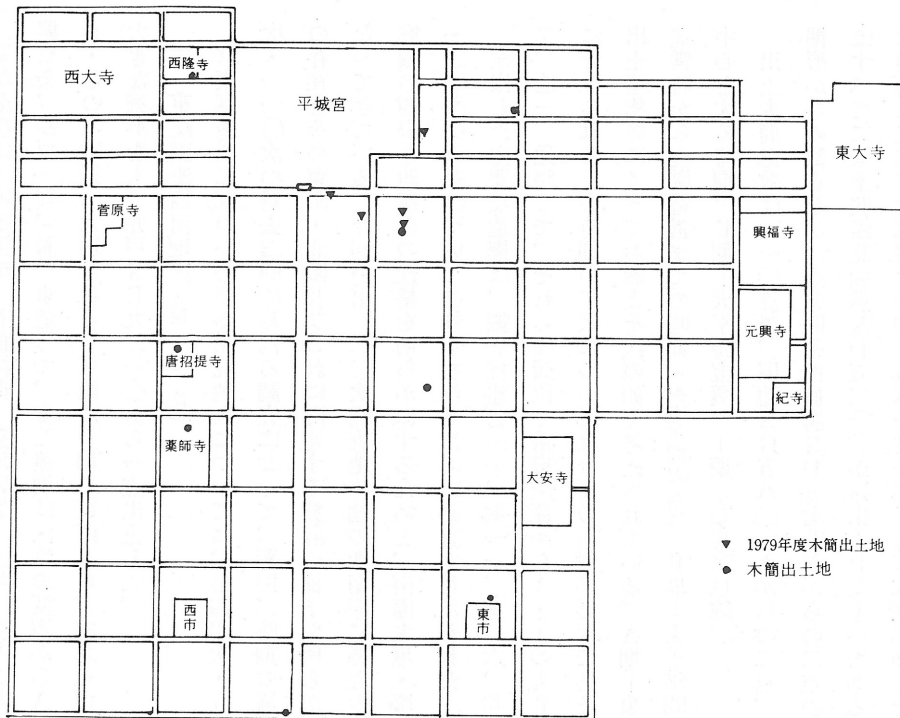
宮東部張出し部のいわゆる東院地区については、第四四次・九九次・一一〇次の過去三回にわたる調査によって、新旧二時期の園池の存在とその東限・北限及びこれに関連する施設の様子が明らかになってきた。今回の第二二〇次調査地は池の西南岸にあたり、庭園の西限と池西部の性格を明らかにするため、南面大垣・埴地・二条条間大路についての知見を得るために調査が行なわれた。

検出した主要な遺構は、掘立柱建物一一、堀一一、溝一六、井戸二、池一、通路二で、それらは層位や重複関係からA～Iの九時期に分けられる。各時期の年代については今後の検討が必要であるが、出土遺物等によっておおよそ次の如く考えられている。A期―東院造営時から庭園造営までの時期(養老年間以前)。B期―天平年間を中心とする時期。E期―天平勝宝頃。I期―奈良末以降。

出土木簡総数は一一〇点で、旧池SG五八〇〇Aからの二点、柱掘形からの数点及び二条条間路南側溝SD五七八五からの二点の他はすべて二条条間路北側溝SD五二二〇〇から出土したものである。南側溝は三回、北側溝は一回の改修を被っている。木簡が多く出土



第1図 平城宮木簡出土地点図 (1980年3月現在) (▼1979年の木簡出土地点)



第2図 平城京木簡出土地点図

▼ 1979年度木簡出土地
● 木簡出土地

した北側溝の改修前の幅は定かではないが、改修後は幅約3mで石で護岸をしている。南北両側溝の改修時期については今後の検討をまたねばならないが、SD五二〇〇については出土木簡によって天平十二年以後と考えられる。

三 左京三条一坊一五坪(第一八次―八)

調査地は、左京三条一坊一五坪の東端部分に相当し、東一坊大路に東面している。また、ここは第三二次調査で明らかにされた、二条大路と東一坊大路の交叉地点からは南へ約一五〇mに位置する。

木簡は総数一八点で、すべて東一坊大路西側溝SD三九三五から出土した。SD三九三五は東半部が現道路にかかっているため、推定溝幅の約三分の二(三〜四m)を南北に約二四mにわたって検出した。溝埋土は上下二層に大別され、木簡は下層からまともに出て出土した。下層からの伴出遺物は、和同開珎一枚と多量の奈良時代末期の土器片で、長岡京時代の土器片も少量混っていた。木簡は文書風木簡・付札・習書等を含むが、いずれも断片あるいは削層である。

四 左京三条一坊八坪(第一八次―二)

調査地は、平城宮跡に南接する北新大池の池底部で、市道拡幅の事前調査として二条大路の南北両側溝の位置確認を行なった。小規模のトレンチなので結論は出しにくい。北側溝は検出できず、南側溝SD四〇〇六のみ検出した。溝幅は肩の部分で三・五m、底で二mを測る。SD四〇〇六から出土した木簡は二点で、両方とも題

籤と思われるものである。

五 左京三条二坊七坪(第一八次―二三)

調査地は左京三条二坊七坪の東南隅にあたる。調査の結果、二坊坊間路の西側溝とその西約一・五mに南北溝一条、柱穴一、土壇一を検出した。木簡が出土した坊間路西側溝は幅約二・五m、深さ約〇・九mで、堆積土は二層に大別される。点数は一九点で、うち一八点が上層から、一点が下層から出土した。なお、同じ所から「主水司」「造少乃」と記した墨書土器も出土している。

六 法華寺阿弥陀浄土院跡(第一八次―三〇)

調査地区は、法華寺阿弥陀浄土院の西北隅にあたり、一九七三年に実施した第八〇次調査地区の北東にあたる。検出した主な遺構は、浄土院内の西辺で南北溝一条、また北辺では東西大溝一条、及び南北溝へ西から流れこむ木樋暗渠等である。木簡は、この木樋中より多量の木片とともに一点出土した。この南北溝と木樋とは奈良時代のものと同断されるが、東西大溝は平安時代末に埋められており、その造成時期は不明である。

8 木簡の積文・内容

一 推定第一次内裏地区

道 □□□□
道請 □□□□
□□ □□ □□ □□

(1)と(2)とは、筆跡や材質から見て、直接にはないが接続するようには思われる。(13)の山野郷は『和名抄』にはないが、『大日本地名辞書』によれば深安郡(明治三年に深津・安那二郡が合体)に山野なる地名がある。なお、この木簡は、上下両端の左右に切り込みがあるだけでなく、上端中央部に丸い小さな穴があげられている。

三 左京三条一坊十五坪

(1) × □川長 秦稻束並稻 × (128) × 20 × 3 081

(2) 丹波国 綾部 × (116) × 17 × 4 081

(3) ・ 「丹波国 □^{〔水カ〕}上郡 × (121) × 24 × 2 019

・ 「村六月万 □^{〔呂カ〕}戸口同 × (56) × 17 × 3 019

(4) 「雑腊 (82) × 33 × 3 081

(5) 曾祢吉人

(6) ・ □ □ □ □ 謹解申請 (176) × 25 × 3 081



四 左京三条一坊八坪

(1) □^{〔志カ〕}摩国 061

(2) □^{〔播カ〕} 061

(1)・(2)共題籤の断片と考えられる。軸の木口部分に国名を記したもので、現状は縦に切断されている。

五 左京三条二坊七坪

(1) ・ × 城 養秦原 ×

軽不 □ (154) × 32 × 3 081

(2) 「手枕里戸主无导津君千嶋一石」 196 × 21 × 4 051

六 法華寺阿弥陀浄土院

・ 「霧寒小 □ 豊継

閑久者 牟也」

・ 「久利久者 牟

夜 久利久者 □

牟夜

132 × 56 × 7 019

9 関係文献

奈良国立文化財研究所

『平城宮跡発掘調査出土木簡概報』十三 一九八〇年

同 『昭和54年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』

一九八〇年

(清田善樹)